FD シンポジウム

「愛媛で教員になるモチベーション」を向上させるために

―教職の授業や学生指導でできることを考える―

教育臨床・江上園子

１．FD シンポジウムの内容

2017 年度の愛媛大学教育学部 FD シンポジウムでは、「教職教養課題特講」の授業の一環として鴛原先生からのお話があった。タイトルは「愛媛で教員になるモチベーションを高める教育内容・方法の充実」であり、佐藤栄作先生・観音幸雄先生・富田英司先生・尾川満宏先生も尽力されているテーマである。

現状として県内からの入学生の比率が 60%であることから、ミッションの再定義での目標クリアが容易ではないということと、教職の大切さや重要性への理解が深まるほど、そして教育実習が近づくほど、大きな重圧や不安を感じる学生が相当数存在するということが述べられた。愛媛県は広く、愛媛県の小・中学校総数の大部分は小規模校であるという前提に立つと、松山市内の学校について知識や経験があるだけでは足りずに、山間部・島しょ部の小規模校の現状や子どもの様子について理解しておく必要があるという。そのため上島町の弓削小学校に訪問し、授業や休み時間の様子を学生たちに観察させたということであった。授業後のアンケートでは、教師になるという意欲が高まった、または高いまま維持されている学生がほとんどであり、さまざまな試みや取り組みが学生のモチベーション向上に有効であるということがわかった。

２．重要である点・参考になった点

本シンポジウムを聴講してとくに重要であると感じた点、参考にしたいと思っている点は、鴛原先生が上記の取り組みの狙いとして「小規模校の弱みを強みにする」とお話しされたことである。学生の進路相談等で話していると、愛媛県の教職志望者であっても、松山市内、あるいは南予ならば宇和島市というように愛媛県内では比較的大きな都市で教師になる希望を持つものが多い。それに対して、これまでの自分は山間部や島しょ部の良いところとして、見聞きした子どもの姿についてのみ触れるしかできなかった。しかしながら本シンポジウムを受講したことで、そのような小規模校の教員が子どもひとりひとりの「個人カルテ」を作成し、子どものあらゆる側面について情報を共有していること、それゆえにその子どもが何か躓いた際には「なぜなのか」という考察も共に行い、内省力・考える力を育てられること、縦割りクラスゆえ全員がきょうだい児童も含めて既知であること、少人数であることから教員と子どもたちとの距離も近いということ、などの具体的で実践的な教員側の努力や子どもたちとの親和性などを知ることができた。したがって今後は愛媛県内の教職志望者に対して、小規模校の魅力を自信を持って伝えられる。

３．課題として捉えた点

自分は１回生必修の教職科目「発達と学習」を担当している。本シンポジウムを受講したことで大きなひとつの課題が見えた。「１回生の際に先生になるという希望が強い学生・まじめな学生ほど『自分に務まるのか？』という疑問や不安を持つ」と鴛原先生の言葉にあったが、これは実習校での評価も高く、授業態度も真面目である学生の多くの姿と重なった。その分、教育学部の１回生全員を授業の対象とする自分にとっては深く響いた。どのようにしたらそのような学生に教職を目指す動機づけを与えられるのか明確な答えは出ていないが、いくつかのヒントはいただけた気がするので、以下に示していきたい。

まず、今回の小規模校の様子を１回生のときから伝えていくことである。学生の中には、多くの子どもの教育支援に携わる自信がないという者もいる。小規模校では子どもの人数が少ない分、ひとりひとりの児童をより丁寧に観て接することができ、教師としてのやりがいにも通じるという点を伝えたい。最後に、子どものいきいきと育っていく姿を、授業時にも映像資料を使って見せていくことである。同時に学生もまだ青年期であり、育つ存在としては子どもと同じであり、教職をあきらめるには早いということ、良い教師ではなく「現場に出ても育っていける教師」を目指す方向性を示していき、学生の教職へのモチベーション向上・維持に努めていきたい。